

【2】 研究の経過と本年度の取り組み

【1】 昨年度（1年次）の取り組み

研究の1年次には、子どもたちの実態を把握し、我々の願いを明らかにするとともに、このテーマのもとに子どもたちを育てていく上での小学部の立場や、「楽しむ」ということの意味について考えていった。

(1) 子どもたちの楽しみ方の実態把握とわれわれの願い

○子どもたちの実態

- ・楽しむための技能が十分でない
- ・自分なりに楽しめているが、楽しむ種類が少ない
- ・みんなで楽しめない

○教師の願い

- ・楽しみ（楽しむ力）を育てたい
- ・楽しみを教えたい（拡げたい）
- ・楽しみをみんなの中で育てたい

(2) 小学部の「楽しむ」とは

小学部の段階の子どもたちは

- ・楽しむことは行動の原動力である
- ・楽しむことで没頭できる子どもたちである
- ・楽しんで活動する中で、生活する力を身につけることができる

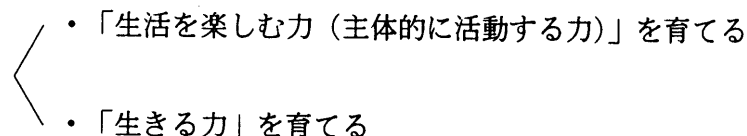
①「楽しむ」具体的な姿 ——（いきいきと活動する姿）

できる、集中する、分かる、共感する、自己決定する、本人参加している、充実感や成就感をもつ、積極的に取り組む、やる気に溢れている、没頭する、成功感をもつ、情緒が安定している、頑張っている、活動が継続している、心を弾ませているにこにこした笑顔が見られる、目の輝きや豊かな表情がある、場から離れない

②「楽しむ」ために育てたい力 ——（生きる力）

基本的な生活習慣、教科・学習的な知識や技能、認知能力、言語理解力、表現能力、コミュニケーション能力、社会性、持続力、自制心、好奇心、集中力、自己決定・自己選択する力、感じ取る心、

※より楽しんで、いきいきと活動するためには、②の生きる力が必要であり、②の力を育てるためには①のような力や活動の姿が求められる。①と②は車の両輪のように、絶えず連動し合うなかで、社会的自立へ向けての力を身に付けていくことができる。

社会的自立 ← 

※「生きる力」も「生活を楽しむ力」も、小学部の段階では楽しい活動の中で育てられていく。今回の研究では、「生きる力」の育成とともに、「生活を楽しむ力」に焦点を当てていこうとした。

(3) 小学部の立場

小学部では「生活を楽しむ力」の素地をつかっていく段階であると考え、そのために次のような方針を立てて取り組んだ。

- | |
|------------------------------------|
| ①自分らしく、持っている力で今をよりよく生きることを大切にする。 |
| ②主体的に意欲をもって活動する（心から楽しむ）経験をたくさん与える。 |
| ③「生きる力」の基礎的、基本的内容をていねいに指導する。 |

※①～③の基本的な方針は・自信を持って自分らしく生きていくこと・生活経験を広げていくこと・将来、いろいろな課題にぶつかった時に、乗り越えられる力や発達の壁を乗り越えていける力を育てること（生きるバネづくり）につながっている。つまり、小学部の子どもたちに上のことを大切にしながら実践していくことで、将来、われわれが願う「生活を楽しむ」人間像に近づいていけるものと考えた。

(4) 研究テーマの設定と授業づくりの視点

小学部では、上の①～③をより具体的にしていくために、中心的な学習である生活単元学習に研究の視点を当て、実践していくことにした。そして、研究テーマを「興味をもちながら、いきいきと活動する子」とし、特に生活単元学習における題材選定と支援の工夫に着目しながら研究を進めていくことにした。

また、子どもたちが主体的に意欲をもって取り組む授業とするために、特に自己活動と思考の過程を重視する取り組みを行うことにした。

(5) 次年度への課題の設定

1年次の実践を終え、次のような課題を確認した。

- ・より客観的な実態把握と発達段階の理解
- ・テーマにせまるための題材の選定
- ・支援の工夫に視点を当てた授業づくり
- ・一人ひとりのめざす像へのアプローチ

〔2〕 今年度（2年次）の取り組み

1年次の課題を基にし、2年次は次のような取り組みを行った。

(1) 発達の観点にたった実態把握

授業を、自己活動、思考の過程の重視といった観点でつくっていかうとした時、一人ひとりの発達や障害、個性を理解することが特に大切となった。（児童の実態、参照）

小学部は発達段階から、次のような時期であるといえる。

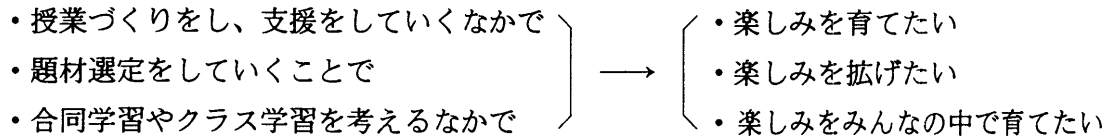
- | |
|--------------------------------|
| ○自我を育て、ことばを育てる時期 |
| ○少しずつ、調整する力、コントロールする力を育てる時期 |
| ・乗り越える力、心のバネを作っていく。 |
| ・個に応じて「～だ」から「～だけれども～する」の力を育てる。 |

これらの力は、友だちと一緒に意欲的に楽しく生活し、充実感・達成感を重ねていくと

ころに育っていく。小学部では今までにも「楽しい生活づくり」をめざしてきたが、今回の研究テーマを受け、発達や障害、個性といったものをより考慮し、授業づくりの実践をしていこうとした。

(2) 教育課程や単元の見直しと生活単元学習の実践

教育課程や単元については、もう一度、小学部の子どもたちの発達段階や、一人ひとりの個性、クラスの実態を考慮して見直すことにした。生活単元学習の具体的な実践は、後のページで詳しく述べるが、生活単元学習を進めていくことで、われわれの考える小学部の願いへアプローチしていけるものと考えた。



(3) 支援の工夫に視点を当てた授業づくり

授業の中で、自己活動や思考の過程を求めようとした時、教師の支援が、とても大きなポイントとなる。そこで、われわれは「支援」に対し、次のような思いをもちながら実践してみようと試みた。

○支援に対する思い

- ・子どもたちが、思考の過程を通った自己活動を展開し、いきいきと活動するための支援の方法を模索する。
(興味をそそる教材や働きかけ、最近接領域での教材づくり、見通しの持たせ方、やる気を起こす言葉かけや示範、ほめ方、自己選択のさせ方)
- ・生きるバネづくりとなるような支援をめざす。
(つまずきやのりこえられる抵抗の設定)
- ・達成感や満足感、自信につながっていくような支援をする。
(できる状況づくり、成功に終わる学習展開)

○支援の内容

PLANの段階の支援	DOの段階の支援
<p>(自己活動のために)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの思いや興味、関心を汲み取っている ・発達段階を考慮して無理がない ・経験したこととつながりがある ・見通しが立ちやすい ・教師と児童、両者に共感がある <p>(思考の過程のために)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で考え、決定し、実行できる ・自由性がある ・経験や楽しみが拡げられる 	<p>(自己活動のために)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・わかりやすい場の設定、組み立て、流れ、 ・具体物の使用 ・わかりやすい発問 ・個に合った声かけ ・繰り返し ・励ます ・ほめる ・共感の声かけ ・好きな教材 ・得意な活動 ・自己選択させる・側で見守る ・落ち着いた雰囲気 <p>(思考の過程のために)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自由性がある ・選択肢の用意 ・ゆさぶりの設定 ・のりこえられる抵抗がある <p>(満足感、充実感のために)</p>

(満足感、充実感のために)	・教師との共感	・成功に導ける教材
・目標にふさわしい題材、教材である	・客観的な評価	・有能感を感じさせる
・のりこえられる抵抗がある	・役に立つ	・使える
		・ほめる

(4) 一人ひとりのめざす像へのアプローチ

小学部の児童の中から数人を選びだし、個人のめざす像に向かってアプローチしていった実践をまとめた。(個人事例、P35～P47参照) (小坂)

【3】 児童の実態

(1) 児童の実態

小学部の児童は、表2のような学年でクラス編成している。また、表3のような主障害を持った児童により構成されている。

表-2 学年別実態

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計
人数	1人	2人	4人	3人	3人	3人	16人
学級	1組		2組		3組		3

表-3 障害別実態

	ダウン症	染色体異常	てんかん	脳腫瘍後遺症	自閉的傾向	もやもや病	水頭症	精神発達遅滞
人数	5	1	3	1	1	1	1	3

(2) 発達検査による実態

児童の実態を遠城寺式乳幼児発達検査でみると下図のようになる。大体2歳～4歳半の発達を示している児童が多い。個人内差を見ると、運動や生活習慣は全体的に高い数値を示している(生活年齢効果の表われ)が、言語に関しては落ち込んでいる児童が多い。

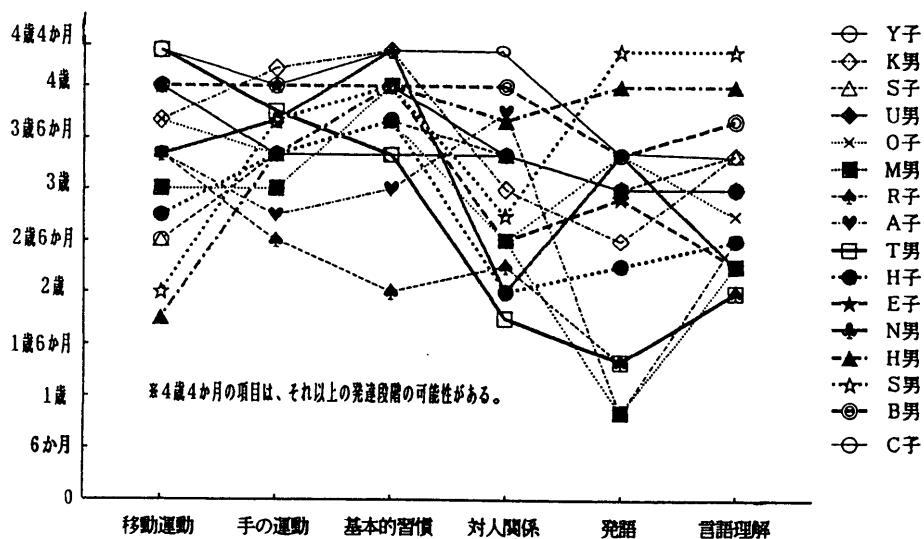


図-1 遠城寺式乳幼児発達検査